

オクトレオスキャンワーキンググループ(最終報告)

代表 遠藤 啓吾 (群馬大学核医学科)

メンバー

日下部きよ子(東京女子医大放射線科)

阪原 晴海(浜松医大放射線科)

高見 博(帝京大学外科)

宮地 幸隆(東邦大学内科)

久保 敦司(慶應義塾大学放射線科)

清水 直容(帝京大学内科)

中條 政敬(鹿児島大学放射線科)

山本 和尙(若狭湾エネルギー研究センター)

神経内分泌腫瘍に対するオクトレオスキャン(インジウム標識ペンテトレオチドによる画像診断)は、海外ではすでに認可されている。しかし稀な疾患であり、日本では現在有効性と安全性について追加臨床試験が必要な状況となった。カルチノイド、インスリノーマ、ガストリノーマ、グルカゴノーマ、VIPoma、ソマトスタチノーマなど消化管ホルモン産生腫瘍を有するか、あるいはその疑いのある患者は、患者数が少なく、短期間で十分な症例数を確保することが非常に困難で、全国的に広く会員に対して臨床試験への参加登録を呼びかけ、臨床治験を終了することができた。

佐賀恒夫先生がこれらデータをまとめ「核医学」に投稿中である。その要旨は、消化管ホルモン産生腫瘍が疑われる40例(既存の画像検査で病変が確認されているA群:18例、ホルモン値が高値であるが責任病変が確認されていないB群:

22例)を対象に、インジウム-111標識ペンテトレオチドを用いたソマトスタチン受容体シンチグラフィ、多施設共同臨床試験を実施した。有効性評価対象35例中、酢酸オクトレオチド負荷試験実施症例においてA群で12/16(75%)、B群で11/19例(57.9%)が有効と判断された。組織診断実施症例ではA群5/9例(55.6%)、B群2/4例(50.0%)が有効と判定された。臨床的有用性について、A群で11/16例(68.8%)、B群で5/19例(26.3%)で「有用」と判定された。これらの結果は稀な症例の臨床治験においては、学会の掲示板などを利用して患者を公募する手法はきわめて役立つ。この手法はこれからも活用されるものと思われる。

今後本剤使用のガイドラインの作成が必要と思われる。

(なおこのWGは研究費の補助を得ていない)